## 原発事故と複合災害からの復興に向けて 被災地だからこそ見える未来の日本の医療の光

# 福島医大で活躍する長崎の医療者

**福島県内で、緊急被ばく医療の要となってきた福島医大は、三年前、長崎大学と放射線医療に関する連携協定を結びました。以降、その協定を基盤として、長崎大学の医師や看護師の移籍や交流人事が行われています。また研修医や医学部学生がお互いの大学を行き来して学び合うなどの交流を重ねています。**

左・大津留晶先生と、右・貫井洋先生。まだ雪の残る福島医大キャンパスで。

IAEA（国際原子力機関）福島レポートのための会合を終え、ウィーンから帰国したばかりの大津留晶教授。震災の年の十月に長崎大学病院を退職し、福島医大で原発事故後スタートした県民健康管理調査の実務を引き受けてきました。「被災地ではもともと社会が抱えていた医療上の問題が、災害をきっかけに急速に目の前に現れます。超高齢化地域の出現などはその一例です。大学として、それらの解決に向けた調査を、何をどういう手順で進めていくのかが重要でした。基本調査、甲状腺健診、こころの健康と生活習慣病調査など各プロジェクトの構築が待ったなしでした。災害後の県民の健康をいかに守ってゆくか、身体的な疾患はもちろん、こころの不安にも向き合える医療体制をめざしました。その過程で、長崎大学が蓄積してきた長崎原爆やチェルノブイリにおける被ばく医療と、影響調査手法が役立っています。また、福島医大では、長崎大学で教えてきた原爆医学概論などの経験をふまえ、放射線災害医療教育プログラムを立ち上げました。IAEAや長崎大学とも協力し、災害地域の医療に生き生きと力をふるえる若い医師を育成する、医学教育の国際的なスタンダード作りに努力しています。被災地でこそ未来の日本の医療の光が見えてくることを信じています」。

先生の元には、今年二月に長崎大学から福島にきた、精神科の医師である貫井洋先生が社会人大学院生の立場で学びはじめました。「精神科のフィールドでもっとしっかり放射線医療を学ぼうと考えました。今後は健康相談にも関わっていきながら、長いスパンで取り組みたいですね」。

---

県民健康調査のデータ収集に関わる業務を支援し、収集したデータを保管し分析するためのデータベースは、柴田義貞先生が開発チームの一員になっています。震災の翌年に長崎大学特任教授の任期を終えた柴田先生。「福島の今後はデータベースがカギだから」と山下俊一先生に請われ、福島入りされました。長崎大学の原研では、長崎原爆被爆者および世界の放射線被ばく者の疫学研究を行うとともに、チェルノブイリなどの大規模調査のためのデータベース開発を手掛けてきました。

「県民健康調査では種々の調査ごとに個人のデータを収集しますが、これをデータベース上で個人ごとに管理することによって、放射線被ばく

のほか種々の要因による健康影響を容易に分析することができます」。

福島に移って二年。長崎では目にしない野菜もあり、日本酒も蕎麦も美味しく、ご夫婦で福島での生活を楽しんでいます。

『福島医大のバス停で出会ったご婦人が車に乗せてくれたのですが、よく聞いてみると保育園の先生でした。自身を含め保護者も放射線が不安というので私が編集した『放射線リスクコミュニケーション』など数冊を差し上げると、今一番欲しい情報だったと喜ばれた。福島に住み、人と関わることで、役に立つ実感があります」。

---

福島第一原発が水素爆発を起こした三月十五日。その日の夕方、REMAT（緊急被ばく医療支援チーム）の一員として長崎から福島入りした熊谷敦史先生と吉田浩二看護師も、現在、福島医大で活躍中です。熊谷先生は、災害医療総合学習センターの副センター長として、放射線の汚染や被ばく患者への対応を医学生に教える演習をはじめ、被災地住民の健康相談や自治体のアドバイザーもこなす忙しい毎日です。

「相談で感じるのは、誤った知識や現状認識のままあきらめている方が多いこと。医師としては皆さんの健康がゴールなのだという価値の共有を再確認すること、なるべく少人数の質問しやすい雰囲気での対話を心

# 飄々と。

## 現場に強いということは冷静になれる資質と打たれ強さがあること

## 福島に住み、福島の人と関って役に立つ実感

——柴田義貞

## なるべく少人数での対話を心がけています

——熊谷敦史

## 「伝える」と、「伝わる」は違う。自分も日々、勉強です

——吉田浩二

## 原子力災害は、自分たちが主体的に立ち向かう問題

——長谷川有史

## そこが雨漏りするから手伝いに来ただけ

——大津留晶

※ベラルーシ…1991年独立した共和国。ソビエト連邦だった1986年、チェルノブイリ原発事故で広範囲に放射性物質に汚染され、住民の多くが被ばくしました。長崎大学の研究者は何度も現地入りし、国際放射線医療の研究課題に取り組んでいます。

がけています。また福島医大はベラルーシ※の二大学と連携しており、先日は学生派遣に付き添ってきました。先方の方々はとても福島に思いを寄せていて、負の記憶ではあるが原発事故の先輩として手を携えたいと言ってくださいます。チェルノブイリ事故後の長崎からの支援への感謝も口にされ、長崎大学の長年の交流実績の重みを実感しますね」。

また吉田看護師は、事故当時、被ばくした患者のヘリコプター搬送にも同乗し、医療支援を行いました。

「現在は、福島医大の学生だけでなく、全国から福島県内に来る研修医などに放射線医療の基礎知識を教えています。しかし短時間では限界がありますね。『伝える』と『伝わる』は違うし、自分自身も学びの途中です。また、健診でよろず健康相談を受け持ち、被災地住民の不安や悩みに対応することもあります。相談で傾聴は重要ですが、聞いた内容を医療者として整理して、大丈夫と言ってあげられるときは言うようにしています」。

---

救急医である長谷川有史先生は、事故直後、福島医大で緊急被ばく医療の現場に直面していました。「実は事故前は、放射線に関する知識も意識も薄かったのです。原発で何かあったら専門のチームが駆けつけるからおまかせしようと。しかし、事態が深刻になるほどに、自分たちが主体的に立ち向かうべきだと気づきました。山下先生や熊谷先生の一級の放射線知識に、早い時期に触れられたのもよかったですね。福島に来た大津留先生が『いや、我々は大したことをしているわけではない。日本が一軒の家だとしたら、雨漏りのある場所の修理の手伝いに来ただけ』と司馬遼太郎の『竜馬がゆく』の一節をひいてサラリと言われたのが印象的でした。現場では様々な葛藤があることは事実ですが、山下先生が『長谷川、もう少しがんばってみろ、社会に役立つことの素晴らしさがわかるぞ。今直面している問題を整理して、時間をかけて世に問おう』と。ありがたい出会いです。ここにいる方々はみんな、欠くべからざる人材です」。

---

山下先生は語ります。

「福島に移ってやってみようと腹をくくってくれた長大関係者は、みんなよく似ていて、飄々（ひょうひょう）としています。現場に強いということは、冷静になれる資質と打たれ強さがあること。こうして福島と長崎の出会いが天から与えられたのならば、私たちはそれに感謝したい。タスクフォースは過渡的なもので、最終的には、福島を支援していくしっかりとした体制と陣容が長崎大学に整備されるのが望ましいと思っています。なぜならば、福島の復興なくして日本の復興はありえないからです」。

最前線に身をおいて闘ってきた先生だからこそ見える風景、それは甦った福島の美しい姿。そのために長崎大学は何ができるのか。模索は、これからも続きます。

### 放射線災害と向き合って——福島に生きる医療者からのメッセージ

福島県立医科大学附属病院の被ばく医療班がまとめたもので、災害当初から関わってきた大津留先生、熊谷先生も執筆しています。また、事故当時の医療者の、苦悩から再生までを力強く書き綴った長谷川先生の一篇は圧巻。デマや偏見にふりまわされず、放射線災害に向き合うための心構えや正しい知識がわかりやすく書かれた一冊です。

（ライフサイエンス出版）